

本日は、お忙しい中、足をお運びくださりまして誠にありがとうございます。

さて、本日は3回目の信長貴富さんの作品展です。

今回演奏させていただく作品は、すべて信長さんによる選曲です。

サブタイトルも信長さんによるものです。

そして、最終ステージは、信長さんご自身による指揮です。

練習を通して、私を含めCANTUS ANIMAEのメンバー全員が、信長さんの世界にどっぷりと浸かる幸せを味わってきました。

今日は、その喜びを、お聴きくださるすべての方と分かち合えればと願っております。

そして、もうひとつ。

本日の演奏会は「祈りのかたち Vol.3」と銘打っております。

信長さんは、「なぜ人は歌うのか」という問いかけを、ご自身の作曲家としての大切な拠り所にしておられると伺っておりますが、その答えのひとつが「祈ること」であることは、キリスト教・典礼音楽が「普遍的な祈りの音楽」として世界中に広がっていった歴史が物語っているところでもあります。

もちろん、「人が歌う理由」については、百人百様であることは言うまでもありません。

しかし、本日演奏する和合亮一さんの詩による作品だけでなく、私は信長さんの作品には、いつも深い祈り、平和への願いを感じずにはられません。

そうした想いの証として、「祈りのかたち Vol.3」と銘打たせていただきました。

度重なる自然災害だけでなく、世界中が不穏な空気に包まれつつある今だからこそ、演奏会という平和な時間をお聴きくださる皆さまと共有できる喜びが、会場に満ち溢れることを希っております。

音楽監督 雨森文也



I

無伴奏混声合唱曲 星の名を知らずにいたい 2024

별 이름 모르고 싶다

無伴奏混声合唱のための『三つのアヴェ・マリア』より

II. アイヌ歌謡・イフンケ(子守唄)によるデフォルメ 2016

『廃墟から』無伴奏混声合唱のためにより 第三章 葬送のウムイ 2007

II

混声合唱とピアノのための

加速し続けるエレジー —折れ曲がった線路の先に— 2014

休 憩

III

混声合唱とピアノのための 鉄道組曲 2020

1. でんしゃは うたう
2. 岩手軽便鉄道の一ヶ月
3. 間奏曲
4. 上野ステーション
5. 夕焼け
6. 恋の山手線

IV

混声合唱とピアノのための 二つの^{おお}巨いなる情景 2019

I. 昨日よりも優しくなりたい

II. いつも夕焼けがある

【監修・客演指揮】 信長貴富 (IV)

【指揮】 雨森文也 (I, II, III)

【ピアノ】 野間春美 (II) 平林知子 (III, IV)

2025年1月26日

渋谷区文化総合センター大和田

さくらホール

CANTUS ANIMAEに信長貴富作品展と題した演奏会を催していただくのは今回が3回目となります。それだけでも大変ありがたいことなのですが、選曲をお任せいただけることになり、しかもワンステージ指揮させていただけるという話にもなって、ただただありがたいとばかり言ってはられない責任の重さを感じながら今日を迎えています。

そのようなわけで選曲にあたっては、まず私が指揮をするステージをどうするかということから考え始めました。真っ先に思い浮かんだのが『二つの巨いなる情景』(詩=和合亮一)でした。これは私のオーソドックスなスタイルの中で、現時点で最も納得のいく記譜ができていると感じている作品だったからです。数年前、熊本で雨森文也先生を中心に実施されている「信長貴富作品展」の中で、今回同様私の指揮で同作を取り上げたことがあるのですが、コロナ禍かつ無観客での開催だったことや、私が十分に指揮を勉強できていなかったことなど、思い残すことが多い本番で、その思いを回収したい……というのも理由の一つでした。

次に、同じく和合亮一さんの詩による『加速し続けるエレジー』が頭に浮かびました。この作品は合唱もピアノも(指揮も!)かなりの難易度であるため、これまであまり再演されてこなかったのが、CANTUS ANIMAEによる名演誕生に期待して選んだものです。東日本大震災によって途切れてしまった常磐線の線路、その先を北へ北へと走っていく電車がモチーフとなっています。

電車と来れば『鉄道組曲』、というわけで、芸達者なCANTUS ANIMAEにこれをぶつけてみたいと考えました。この作品もコロナ禍の熊本「信長作品展」にて雨森先生の指揮で取り上げたことがあり、思いの回収という意味合いも重なっています。

最後まで迷ったのが第1ステージにあたる部分でした。CANTUS ANIMAEの豊かな声そのものをア・カペラで示したいと考え、戦後80年に思いを巡らせながら、さまざまな言語による祈りの歌を集めました。

結果として、第1ステージの1曲を除き、ここ十年あまりの中で作曲した最近作が集まりました。十年あまりというのは、東日本大震災以降と言い換えられます。特に意図せず、主に震災以降の作品によるプログラムになったわけですが、このことは、私の作曲姿勢が震災以前と以後とで転換したことを暗に示していると思っています。生き方の転換、あるいは覚醒と言ってもいいかもしれません。『加速し続けるエレジー』で歌われる「途切れた線路」——その先を私たちは創りながら生きている。そんなイメージから、演奏会のタイトルを「ともに拓く現代」としました。私の取り留めのない思いの連鎖から選曲した演目でしたが、CANTUS ANIMAEと共に向かいたいビジョンに立つことができましたように思います。

指揮の雨森文也先生、ピアノの野間春美さん、平林知子さん、CANTUS ANIMAEの皆さま、各位に心から感謝申し上げます。

(信長貴富)



信長貴富

1994年上智大学文学部教育学科卒業。1994・95・99年朝日作曲賞(合唱曲)、1998年奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第1位、2000年現音作曲新人賞入選(室内楽曲)、2001年日本音楽コンクール作曲部門(室内楽曲)第2位などを受賞。多数の合唱曲のほか、オペラ、歌曲、器楽作品など多岐にわたる。主な作品に《新しい歌》(合唱)、《Fragments ～特攻隊戦死者の手記による～》(独唱/合唱)、《マリンバ協奏曲 混線するドルフィン・ソナー》、《オペラ 山と海猫》(まつもと市民オペラ委嘱、加藤直台本・演出、佐川吉男音楽奨励賞)、《オペラ ルドルフとイッパイアッテナ》(オペラシアターこんやく座委嘱、いずみ凜台本、立山ひろみ演出)などがある。

無伴奏混声合唱曲 星の名を知らずにいたい 2024 별 이름 모르고 싶다

『星の名を知らずにいたい』は、谷川俊太郎氏と申庚林(シン・ギョンニム)氏の共作対詩の中から、谷川氏が作った5行の詩に作曲されたものである。対詩とは二人の詩人が交互に詩を書き、一篇の詩を仕上げることをいう。二人の結び付きについて、谷川氏はこう記している。「国家と国家がぎくしゃくしていても、詩人と詩人はそこに身を置きながらも、そこから離れたくつろいだ空間で、政治家の言葉とは次元の違う詩の言葉で交換できることを私はうれしく思っています」。信長氏は、初演パンフレットに、この言葉が作曲動機を代弁していると記している。世界はかつてない困難に直面しているが、さまざまな隔たりを超えて、人間がつながりあえると自分は信じている、と。

——ソウルの空に星がきらめくのを見たのだが
朝起きるとアパートの堀に
真っ赤な薔薇が何輪かしがみついて笑っている
地上には太初に言葉があり
星と花のまばゆいダンスがあった——

申氏のこの詩を受けて谷川氏が送った詩が、本作のテキストに使われている「星の名を…」である。

本作は二群の混声合唱により構成されている。はじめは谷川氏の日本語の詩に付曲された「I」を一群が歌い、次にそれが韓国語訳された詩に付曲した「II」を二群が歌う。最後に「I」と「II」を同時に演奏する。日本語群の「I」は基本4拍子系で進行するのに対し、韓国語群の「II」は朝鮮民謡アリランを彷彿とする3拍子系で進行する。そのため詩の内容は同じだが全く異なる雰囲気の2曲となっている。この2曲が同時に演奏された時に生まれる世界は、まるで二つの民族が手を取り、星となっていくように響き合う。

今年2025年は戦後80年にあたる。世界では、今もなお争いが絶えず起こり、人が亡くなっている。谷川氏は生前、言葉の不完全さを訴えていた。言葉では感じたことの10%も表現できないと。しかし、我々は歌を歌うことで、音楽を通して彼らが世に遺した想いを伝えていくことができるはずだ。谷川氏も申氏も、奇しくも昨年2024年に星になった。二人の詩人を悼むとともに、世界の平和を祈りながら本日の演奏に臨みたい。

(大城颯佑)

【参考文献】

在日本大韓国民団新聞(2012年7月4日)

朝日新聞デジタル版(2015年4月7日)

『酔うために飲むのではないからマッコリはゆっくり味わう』(CUON社)

無伴奏混声合唱のための『三つのアヴェ・マリア』より

Ⅱ. アイヌ歌謡・イフンケ(子守唄)によるデフォルメ 2016

本作は、アイヌ民謡の音素材を用いて典礼文“Ave Maria”に作曲したものである。民謡そのものが聞き取れるように作曲されていないため、タイトルに「デフォルメ」と付されている。

“Ave Maria”は、大天使ガブリエルによる受胎告知から始まる祝詞である。人々が待ち望んでいた救い主を、聖母マリアが受胎したのだ。一方で「イフンケ」とはアイヌ民族の一部地域で「子守唄」のことを指す。こちらは典礼文とは対照的に、決まった歌詞をもたない。「イフンケ」の原義について、アイヌの言語学者、知里真志保博士は「音を発して赤ん坊をあやすこと」だと述べている。子守唄は、「オホ、ルル、オホ、へ」や「ホ、ロ、ロ、ロ、ロ」などの意味のない音声群に「アフ、ワ、アフ」などの掛け声が入り、その間に思い付く文句を投げ入れて即興的に歌われた。そのうち人に感銘を与えた名文句が歌い継がれ、ある程度固定したものが残されたのである。

信長氏は、楽譜のあとがきにこう記している。

エリザベト音楽大学の川野祐二学長から作曲委嘱のお話をいただいた際、「宗教曲を」とのご提案がありました。それは私が長い間避けてきた分野でしたのでしばし悩みましたが、手始めに比較的短いテキストである Ave Maria に作曲してみてもどうかというヒントを川野学長からいただき、取り組むことにしました。

作曲にあたってはまず、マリア信仰を母性への憧憬・畏敬として普遍化し、日本の伝統的な子守唄の旋法と結びつけることを基本的なアイデアとしました。

マリア信仰の母性への憧憬・畏敬と、アイヌの母親の口から即興的に歌われてきた子守唄。二つの世界からどんな祈りの音楽が紡ぎ出されるのか、体感してもらいたい。

(木下翔太)

【参考文献】

『アイヌ伝統音楽』(日本放送出版協会)

『廃墟から』無伴奏混声合唱のためにより 第三章 葬送のウムイ 2007

『廃墟から』無伴奏混声合唱のために」は、太平洋戦争の三つの舞台、広島、ガダルカナル島、沖縄をそれぞれテーマとした三つの章からなる作品で、「葬送のウムイ」はその第三章にあたる。第一章「絶え間なく流れてゆく」、第二章「ガ島前線」で絶望が表現される中、第三章は「うちなぐち(沖縄方言)」による伝承詩に、沖縄の伝統的な音づかいが用いられ、美しく神聖な印象が感じられる。まさに「救いの音楽」と言えよう。

「ウムイ」とは沖縄の神事で歌われる神歌のことを指しており、本作は沖縄本島の勝連町平安名(現在のうるま市勝連平安名)に伝わる「葬式のウムイ(そーしきぬうむい)」を題材としている。葬式という儀式は、故人の冥福を祈るための儀式であると同時に、この世に残された人々を救うための儀式でもある。沖縄の地においても、死を受け入れ、前を向いて生きるために必要不可欠な儀式であったに違いない。しかし、そうした儀式も、戦火の中ではどうであったのだろうか。沖縄戦では、18万8千人あまりの命が失われたと言われている。

最後に、信長氏本人による楽譜の前書きを紹介する。

曲中、繰り返し出てくる「ヨーンナ」という言葉は、具体的な意味を持たない囃子言葉のようなものである。「ゆっくり」という意味の沖縄方言でもあるが、ウムイの中でその語意が生きているかどうかは不明だ。私には、キリスト教歌でいうところの「アーメン」のような位置づけの言葉のようにも思える。

美しい沖縄の海が真っ赤に染まった約80年前。当時の状況がどれだけ悲惨であったのか、戦争を経験していない私は、残っている資料から想像することしかできない。しかし、向き合い続けることに意義があると信じている。「ヨーンナ」と死者の冥福を祈り、そして生き続けるために私たちは「ヨーンナ」と歌うのである。

(矢本紗菜)

混声合唱とピアノのための 加速し続けるエレジー —折れ曲がった線路の先に— 2014

「混声合唱とピアノのための『加速し続けるエレジー—折れ曲がった線路の先に—』は、2014年8月に行われた東京混声合唱団「東混・八月のまつり35」のために作曲された。詩は福島県出身・在住の詩人である和合亮一氏による。

和合氏は、自身も体験した東日本大震災の6日後から当時のツイッター（現X）にて詩を発信しており、これらの詩には、被災地での経験や感情が反映されていた。そうした詩をまとめた詩集『詩の礫』『詩の礫 起承転結』『詩ノ黙礼』と、震災から3年後の2014年3月10～11日にツイッターで発信された詩が本作の基盤となり、コラージュして使用されている。和合氏がツイッターで発信し続けた言葉たちは、140字という制限の中で作られているがゆえか、筆者に、剥き出しの修羅を感じさせるのである。それがピアノの痛切な打鍵によって断絶され、音画的に配置された音符が聴く者の中にじり寄ってくる。その表現は、一瞬にして1万人以上の命が波へさらわれていったさま、生き残った者たちの慟哭や怒り、そして、罪悪感を表しているように思える。後半のゆったりしたメロディーは、福島^{はうほう}の街並み、野原、風や草木の匂い、そして帰れなかった人たちの思う哀しさを想起させる。そして「貨物列車は 続いていく 北へ 北へ」と歌い上げ、曲は終わる。

きみは 人生をどんなふう^{ほうほう}に生きているだろうか ぼくは きみに 大した自慢を 出来るようなことは
していない けれど こんなふう^{ほうほう}に思う グラスから こぼしてしまった水は 戻らない

[和合亮一 作／2014年3月10日ツイッター（現X）への投稿より]

あの震災から14年経つ。私たちの世界は、相変わらず目まぐるしい。国際的には豊かな日本だが、私たちの暮らしは、遠くで失われている命や悲しい現実の上に成り立っていると、どこかで意識している。残された私たちは、生きるために、悲しみを、罪悪感を、後悔を忘れながら進まざるを得ない。そんな矛盾を抱えながら、^{ほうほう}這々の体で明日へ進む私たち日本人に、「どうして!」「なぜ?」と問い掛けてくる本作は、もう会えない人と生きている人への“エレジー”である。皆さまの心に響き、私たちの言葉がこだますることを願っている。

(香原 凜)

混声合唱とピアノのための 鉄道組曲 2020

「混声合唱とピアノのための『鉄道組曲』」は、「かかっ かかっ」と徐々に近づいてくる電車の音と共に始まる。この特徴的なオノマトペは、電車の発車から停車までの動きを擬音語と絵で表現したユニークな絵本『でんしゃは うたう』（三宮麻由子 作）から採られており、絵本のタイトルがそのまま1曲目のタイトルにもなっている。

2～5曲目は近現代を代表する詩人が連なる。2曲目は、宮沢賢治の「岩手軽便鉄道の一月」である。広がる田園風景に始まり次々移り変わる景色を軽やかな音色と共に表した、ぴかぴかと晴れやかな冬の一日の曲である。

3曲目に位置する「間奏曲」は、石川啄木の有名な詩に滲む郷愁をわずか9小節に織り込んだ、組曲中唯一の無伴奏曲である。曲中で歌われている停車場とは上野駅のことであり、当時は東北地方への玄関口であった。

3曲目からはattacca（切れ目なく演奏する）で4曲目へと導かれ、望郷の想い溢れる室生犀星の「上野ステーション」へ続く。電車の情景から「私」の状況へと曲は移り変わり、ふたたび景色へと帰ってくるとともに、電車は遠ざかっていく。5曲目の吉野弘「夕焼け」は、内容が一気に現代へ飛ぶ。満員電車に揺られる娘の心理を客観的に描き、娘が優しい心の持ち主であるからこそ受難者となり、俯いてしまったために美しい夕焼けを見ることもできない不条理さを描いている。

終曲「恋の山手線」は、四代目・柳亭痴楽が落語のまくらとして使っていた「綴り方狂室」シリーズから同名の落語を、レトロな昭和歌謡のテイストに仕上げています。山手線の駅名を面白おかしく紹介していくこの楽曲では、落語として演じられていた当時の口上をそのまま使用しているが、以降山手線には新たに二つの駅が開業しており、現在との違いを探してみることで楽しむのではないだろうか。

信長氏は、この面白い口上をいつか使いたいと温めていたそうで、鉄道の曲を作りたいと考えていたことも相まって、組曲の作成に至ったと語っている。多くの人々の人生に鉄道がもたらしたであろう小さなドラマを、本日の演奏においては表情豊かに表現したい。

(酒井香穂)

混声合唱とピアノのための 二つの^{おお}巨いなる情景 2019

楽譜のまえがきに、信長氏はこう記している。

委嘱にあたっては、全国から寄せられた熊本地震・九州北部豪雨災害への義捐金が大きな支援となっていると伺いました。また、昨年(2018年)が大分県合唱連盟の創立70周年だったそうで、このことも一つの契機になったとのこと。これらの経緯から作曲の機会をいただけたことは、私にとって大きな重みを持つ出来事でした。

被災当事者である和合さんのふるさとへの強い思いは、福島や東北という枠を越えて、すべての人が共有する感情であると私は考えます。今回選んだ2つの詩からは、ふるさとへの愛、人間への愛があふれんばかりに伝わってきます。言葉の向こう側には大きな風景が広がっています。それはきっと、歌う人、聴く人、それぞれの心の中にあるふるさとの風景です。

昨日よりも優しくなりたい

「僕」の体は音楽であり、心は言葉であり、影は油絵、そして記憶は宇宙であるという独白から各節が始まる。「僕」を構成する要素は常に世界に影響を与えている。筆者には、「昨日よりも優しくなりたい」という願いは、自分自身が影響を与えうる全ての他者の尊重、人への愛の発露であると感じられる。一方で、昨日の自分よりも優しくなりたいという想いは、せめて少しでも良い人間でありたいという、生きる上で避けられない心細さも内包しているのではないか。不安を抱えながらも、全身全霊で世界に存在し続ける人間の姿が、信長氏の技法により力強く表現されている。

いつも夕焼けがある

自身の中には常に「夕焼け」があるという独白から始まる。和合氏にとって夕焼けとは何であろうか。人が還るべき故郷の暗喩、一抹の寂しさ、決して覆らない別れの象徴。眼差しの先、坂道の上で夕焼けを背にした誰かが立っている。手を振りお互いに近づこうとしても、その距離は決して近づくことはない……どうしようもない悲しさ、やるせなさ、怒り、失った人々への想い……。和合氏の言葉から信長氏が思い描いた夕焼けを、皆さんはどう受け止めるだろうか。皆さんの心の中に大きな夕焼け空が広がるよう歌いたい。

曲集の出版にあたり、信長氏は『二つの巨いなる情景』と名付けた。力強くダイナミックなメロディーで形作られるこの二つの曲から、皆さんは、どんなふるさとの風景を思い起こすだろうか。心の中の巨いなる情景に、しばし耳を傾けてほしい。

(村山恭平)

和合亮一

1968年福島市生まれ、福島市在住。詩人。中原中也賞、晩翠賞、萩原朔太郎賞、NHK東北放送文化賞など受賞多数。2011年、東日本大震災直後の福島からTwitterで連作詩『詩の礫』を発表し続け、国内外から注目を集めた。2017年7月、詩集『詩の礫』がフランスにて翻訳・出版され、第1回ニュンク・レビュー・ポエトリー賞を受賞。フランスでの詩集賞の受賞は日本文壇史上初となり、大きな話題を集めた。また英訳詩集『WAGO RYOICHI / SINCE FUKUSHIMA』が2024年度の全米文学翻訳者協会の翻訳賞にノミネートされるなど、詩人として国際的な評価が高まっている。新聞や雑誌へのエッセイの連載や合唱の作詞、ドラマやオペラの台本なども数多く手掛けている。親しまれてきた詩や合唱曲は、小・中・高等学校の教科書に多数掲載されている。「あいち国際芸術祭2022」日本代表アーティストに選出。最新刊は詩集「L I F E」(青土社)。